

コレクション展

斎藤義重という起点

— 世界と交差する美術家たち

Saitoh Ghiju (Yoshishige), A Starting Point – Artists Intersecting with the World: From the Museum Collection



2024 年 4 月 20 日 (土) – 6 月 30 日 (日)

April 20 (Sat) – Jun 30 (Sun), 2024

神奈川県立近代美術館 葉山 展示室 3b

The Museum of Modern Art, Hayama Gallery 3b

1. 世界へ—斎藤とパリの日本人作家たち

東京大空襲によって作品や家財の一切を焼失し、斎藤は失意のなかで終戦を迎えた。経済状況の悪化と病気のなかで千葉県浦安市に移住すると、港町の活気ある暮らしに支えられ、次第に制作活動を再開する。1957 年、第 4 回日本国際美術展で《鬼》が K 氏賞を受賞すると、斎藤は一躍美術界で注目を集めた。本作にみられる漢字をモチーフにした記号的性質や、《漁村》のように具象的な図像を手がかりとした作風には、戦前の作風と共通する造形要素を認めることができるだろう。《コラージュ》のように時に書へ接近しながらも、次第に図像性から脱却し非再現的な抽象表現へと展開していく。

東京画廊での個展で注目を集めるなか、1959 年には第 5 回サンパウロ・ビエンナーレに出品し、1960 年にはグッゲンハイム国際美術展で受賞するなど、活動の場を世界へと広げていく。斎藤は第 30 回ヴェネチア・ビエンナーレに今井俊満、小野忠弘、佐藤敬、豊福知徳、浜口陽三、柳原義達、山口薫とともに選抜された。1950 年代より多くの日本人作家がパリを拠点としてお

り、とりわけ当時はアンフォルメル絵画（非定形の抽象絵画）の流行を背景に、今井や佐藤、堂本尚郎や土橋醇らが注目を集めていた。ビエンナーレを機に斎藤は初めて渡欧し、欧州各地を順遊するなかで彼らを訪ねた。とりわけ同世代の佐藤とは帰国後も書簡を交わし、互いの制作を励まし合った。

帰国後、斎藤は作品の更なる展開を求め、建物の壁に刻まれた傷跡に着想を得て、電動ドリルで板に条痕を描く絵画に取り組んだ。描く行為を排除し、絵画の物性を強めるなかで合板レリーフの作風を確立すると、1964 年には 2 度目となる第 32 回ヴェネチア・ビエンナーレに出品する*。共に選抜された堂本尚郎は、批評家ミシェル・タビエと決別し、新たに発表した〈連続の溶解〉シリーズによって若手に贈られるアーサー・レイワ賞を受賞。美術の動向はすでに新しい局面を迎えていた。国際展の参加を通じて、斎藤は欧州の美術を肌で感じ、外国で活躍する日本人作家と関わるなかで世界へと目を開いていった。

* 出品作家はオノサトシノブ、斎藤義重、堂本尚郎、豊福知徳。

2. 斎藤義重アーカイブをひらく

当館では斎藤義重のご遺族にご寄贈いただいた旧蔵品のうち、書籍（洋書・和書・雑誌・リーフレット等約 3,000 冊）と作品を「斎藤義重文庫」、資料を「斎藤義重アーカイブ」と位置付け、整理と公開を進めている。資料には、自筆のノートと手帳、美術関係者が斎藤に宛てた書簡、写真、マケット、芳名帳、講演録、新聞の切り抜き等が含まれる。斎藤は学生に自身が揃えた蔵書や作品、写真を惜しみなく紹介し、若者たちは斎藤との対話を通じて現代美術を見る眼を培っていった。作家として、また教育者として美術界で斎藤が果たした大きな役割を顧みるとき、遺されたこれらの資料は重要な意味を持っている。本展では 1960 年代前後の資料を中心に紹介する。

ノート・手帳 新聞や雑誌から関心のある文章を抜き出して書き留めたり、制作にかかわるメモを記したもので、全 60 冊にのぼる。1960 年代半ば、絵画の道を模索していた斎藤は過去の作品を検証し 1970 年代末には三次元空間を使った立体的な作品へと展開していった。ノートからは斎藤の思考の断片を知ることができる。

書簡 主に作家、画廊主、批評家などが斎藤へ宛てた手紙や封書で約 600 点* にのぼる。斎藤は 1960 年より海外に渡航する機会が増えると、パリやミラノにアトリエを構えていた日本人作家たちと頻繁に手紙を交わしており、現地の美術や作家たちの情報を交換していたことがわかる。また教え子からの手紙も多く、斎藤が好奇心をもって若手作家の仕事を見守っていた様子が窺える。

*年賀状や展覧会の案内状などを除く

写真 1950年代から晩年に至るまでの様々なフィルムやプリント類が納められている。斎藤は写真家である大辻清司との出会いをきっかけに写真に関心を深め、友人との集いや、旅行、自身の展覧会の記録、他作家の作品などを撮影した。その多くを占めるのが、海外旅行や渡航中に見た作品の記録で、自身の資料として用いると共に、教鞭を執る学校の学生たちにも紹介した。

写真から

1960. 7-8 欧州滞在

1960 年 7 月、斎藤は第 30 回ヴェネチア・ビエンナーレへの出品に際して渡欧する。展覧会を視察した後、東京画廊の山本孝や林英彦と共にイタリア（ヴェネチア、フィレンツェ、ミラノ、ローマ）とフランス（パリ、ドルトーニュなど）の各都市、ジュネーブ、ロンドンなどを 1 ヶ月かけて順遊した。各所を撮影した写真からは、初めて西欧の文化に対面する興奮が伝わってくる。ミラノでは敬愛するルーチョ・フォンタナのアトリエを訪ね、ロベルト・クリッパとも交流した。パリでは批評家の瀬木慎一と共に行動し、堂本尚郎や佐藤敬などの日本人作家のほか、ピエール・スーラージュなど日本と縁のある画家など多くの美術関係者と面会した。1960 年 4 月にヌーヴォー・レアリズムを提唱して新風を起こした批評家ピエール・レストानीや、イヴ・クライン、セザール・バルダッチーニとも交流している。またこのとき、ラスコー洞窟を訪れて感銘を受けたという。建物の壁や古代中世の遺跡、レリーフの写真も多数あり関心の所在が窺える。



1



2



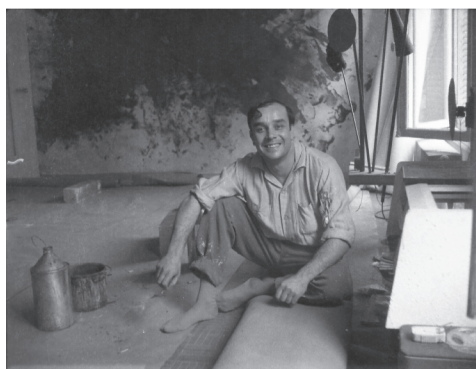
3



4



5



6



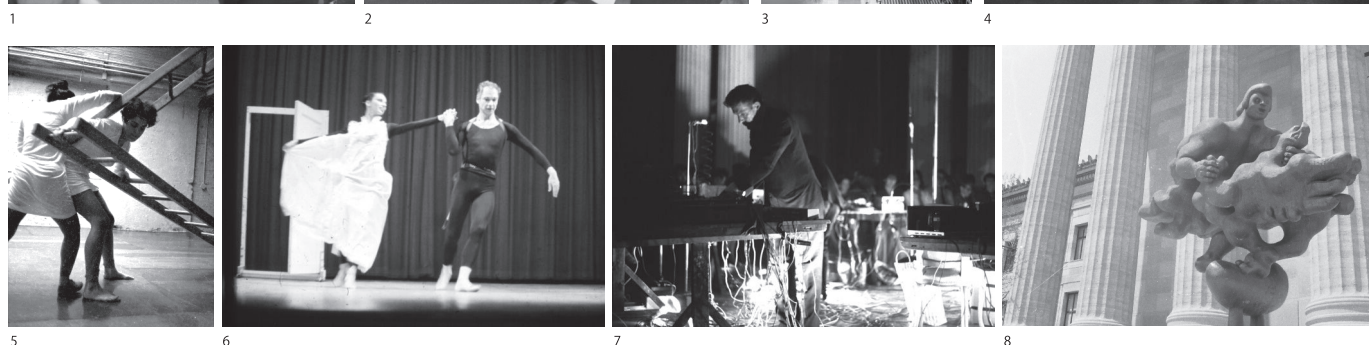
7



8. ヴェネチア・ビエンナーレ 日本館 斎藤作品展示風景 9. ヴェネチア・ビエンナーレ イギリス館 10. コロッセオ（ローマ） 11. 山本孝、斎藤義重（パリ） 12. 斎藤義重、山本孝、ルーチョ・フォンタナ（ミラノ） 13. イヴ・クライン（パリ） 14. 佐藤敬（パリ） 15. ルーチョ・フォンタナ作品（ミラノ） 16. イヴ・クラインのアトリエ（パリ） 17. 佐藤敬、瀬木慎一、ピエール・レストानी、セザール・バルダッチーニ（パリ） 18. 大英博物館（ロンドン）

1965.12-1966.5 アメリカ滞在

ニューヨーク近代美術館ほかアメリカを巡回した「新しい日本の絵画と彫刻」展への参加を機に、1965年12月から渡米。かねてより関心を抱いていたニューヨークを拠点として半年間滞在した。欧州とは異なる街並みやヴェトナム戦争反対のデモによる市街の喧騒も撮影している。精力的に舞台を観覧し、ジャドソン・ダンス・シアターやマース・カニングハムの舞台、ロバート・ラウシェンバーグのパフォーマンス、ジョン・ケージの公演を記録している。なお旧蔵書には「9つのタペー映像とテクノロジー」（1966年10月）の公演図録も含まれていることから、帰国後も舞台芸術に関心を抱いていたようである。展覧会では《ナナ》で注目を集めていたニキ・ド・サンファルの個展（イオラス画廊）、アメリカとイギリスの現代彫刻およびミニマルアートの動向を総覧した「プライマリー・ストラクチャーズ」展（ジュイッシュ・ミュージアム）、フィラデルフィア美術館所蔵のマルセル・デュシャンの作品群を観覧し、作品の写真を多数撮影している。書簡を紐解くと、斎藤が現地の美術動向について周囲の美術関係者や若手作家と情報交換し、滞米を経てアメリカの美術を高く評価していたことがわかる。



1-2. ヴェトナム戦争反対デモ 3. ニューヨークのビル街 4-5. ダンス・パフォーマンス 6. マース・カニングハムの舞台（会場不詳） 7. ジョン・ケージの公演（会場不詳） 8. ジャック・リブシッツ《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》（フィラデルフィア美術館） ＊記載のあるものを除き撮影場所はニューヨーク

1960-1970年代 日本にて

斎藤は家族や友人との旅行、美術関係者の集まりなど、折々で写真を撮影している。斎藤の勧めで1950年代から欧米で活動した宮脇愛子とは頻りに書簡を交わし親交を深めた。滞欧中に知り合った関係者との交流は帰国後も続き、1961年に東京画廊の個展のために来日したロベルト・クリッパ、フリーデンス・フンデルトワッサーと親交を深め、ピエール・レストानीも自宅に招いている。この自宅は1963年に竣工した横浜市南区六ツ川のアトリエで（設計は清家清）、しばしば美術関係者が集い、東京画廊や南画廊に関わる作家や批評家が訪問した様子が記録されている。外壁には訪れた人が思い思いのサインを残しており、サイン会はときに作家による即興的なイベントとして催されたようだ。また教鞭を執った多摩美術大学の制作展、Bゼミの発表会の活気ある様子も記録している。大学の卒業生を中心に、教え子たちは斎藤を慕って自宅を訪問しており、記念写真も多数残されている。



1. 宮脇愛子（1970 頃、長野） 2-3. 東京画廊と南画廊関係者の集い、自邸外壁へのサイン会（1970 年代、横浜自邸） 4. 吉田槩子、吉田有紀、吉田克朗（1970 年代後半、横浜自邸） 5. 多摩美術大学制作展（1967 頃） 6-7. B セミの発表会（1970 年代、横浜） 8. 関根素の、関根光才、櫛下町順子（1977、横浜自邸）

本展参考出品 関根伸夫《位相一大地》（1968）制作記録写真

撮影・画像提供：小清水漸

関根伸夫は 1968 年に多摩美術大学大学院の斎藤義重教室を卒業。同年 10 月に開催された神戸須磨離宮公園現代彫刻展に《位相一大地》を発表した。当時、富士見町アトリエにいた小清水漸と吉田克朗は、制作を手伝うために上原貴子、大石桃子、櫛下町順子と共に神戸へ赴き、土を円筒形に掘り、掘り出した土を穴の隣に円筒形に積み上げる土方作業を 5 日間にわたって行った。本作は「もの派」という美術運動が始まるきっかけとなった。



教育関係資料—多摩美術大学 学生運動資料を中心に

斎藤義重と教育の関わりは戦後から始まる。出版事業を辞め、絵画教室によって生活を立て直すなかで描かれた少女の素描からは、困難のなかで逞しく生きる子どもの生命力に、斎藤自身が心惹かれた様子を知ることができよう。やがて 1964 年に多摩美術大学絵画科の教授に着任すると、斎藤は絵画という枠に縛られた旧来のカリキュラムを見直し、現代に即した美術教育の在り方を模索する。作家として第一線で活躍するばかりでなく、「教えない」ことを信条とする独創的な教育を進めた斎藤のもとには、教室を超えて学生たちが集った。また、斎藤は横浜市で画家の小林昭夫が開催した富士見町アトリエに招聘され、現代美術を専門に講じる A セミや B セミを担当。大学の学生もこれに参画して、現代美術の本格的な学習の場の創設を目指した。

1968 年頃から多摩美術大学では紛争が起こり、その渦中で理事と対立した斎藤を含む教授陣は全学教授会を発足。1969 年 1 月に大学が封鎖されると、バリケードが建つ学内で自主ゼミを開講し、やがて学外に場を求め学生とともに先鋭的な授業を実施した。「ゼミ通信」記載のカリキュラム表を振り返ると、ゲスト講師には李禹煥や多木浩二など第一線で活躍する作家や批評家

が招かれ、また学生主体で当時紹介され始めた現象学についての講義が実施されるなど、活気あるゼミが開かれた。

なお多摩美術大学に関する斎藤の旧蔵資料は、大部分が全学教授会の文書と、学生が学内で配布した様々なアジェンション・ビラやアンケートなどである。なかには堀浩哉、彦坂尚嘉、石内都らによって結成された美術家共闘会議（1969-1971）の関連資料など、今日では 1970 年代の美術を語る上で欠かせない貴重な資料も含まれている。一方で、資料群には様々なグループや他大学のビラが含まれており、斎藤は特定のグループだけを支持していたわけではなかった。この頃にかかれたノートには、世界で勃発している学生運動や、教育の在り方についてのメモを多数書きとめており、斎藤が若者たちの心の動きに関心を寄せ、教育者としての使命を真摯に検討していた様子が見える。

斎藤は 1973 年に多摩美術大学を退職するが、教育への思いは 1982 年に彫刻家の飯塚八朗とともに設立した学校法人中延学園東京芸術専門学校（TSA）の運営に引き継がれた。学長に着任すると多摩美術大学の教え子を教員に迎え、若手作家の育成に情熱を傾けた。

斎藤義重と松澤宥

日本におけるコンセプチュアル・アートの先駆者として知られる美術家・松澤宥（1922–2006）。二人の出会い、松澤が美術文化協会に参加した 1952 年に遡る。松澤の書簡によると 1960 年代に斎藤のアトリエで二人は初めて話し、1964 年に松澤が始めた観念芸術をいち早く斎藤が評価したという。1960 年代半ば、斎藤はコンピューター・アートに関心を寄せており、松澤は 1956 年から 1957 年までコロンビア大学で現代美術や宗教哲学を学んだことを契機にサイバネティクスに通じていたことから、この話題で大いに盛り上がったという。この頃から親交を深め、例えば 1968 年 6 月に松澤が企画した「観念絵画合成の誘い」には斎藤も参加し、作品を季刊誌『Galant 4』（La Galant

Village）に掲載している。また松澤が開催した「美術という幻想の終焉」展のシンポジウム（信濃美術館、1969 年 8 月 10 日）には、斎藤も駆けつけた。斎藤が旧蔵していた松澤作品の一つは、縦長の白い布に 18 枚の素描が貼り付けられたコラージュで、これは 1965 年に松澤が内科画廊での個展で発表した作品と同一のシリーズと考えられている（のちに個展「ψ(プサイ) の部屋から一九から球へのお便りー」展（岡崎球子画廊、1986 年）でも発表）。また松澤が 1967 年から知人に送った「ハガキ絵画」も所蔵していた。松澤との交流からは、斎藤が自身の絵画を模索しながら、芸術を成立させる上で物質と観念の調停を検討していた背景を知ることができる。

出品一覧

凡例
出品作品は原則次の順序に従って記載。作品は作家名 / artist、作品名 / title、制作年、材質・技法、エディション、寸法（紙寸：h × w × d cm）。
資料（斎藤文庫）は英文、材質・技法、寸法等なし。所蔵はすべて神奈川県立近代美術館。作品のうち斎藤義重文庫は「●」として表記する。資料の判読不能な文字は「□」とし、書簡は消印を「□」に記載する。
出品作品は都合により変更する場合がある。

斎藤義重 / Ghiju (Yoshishige) Saitoh (1904–2001)			
少女 / A Girl	1947	墨、紙	25.8 × 18.2
浮浪童女 / Waif Girl	1947	墨、紙	25.8 × 18.2
少女 / A Girl	1947 年頃	墨、紙	25.2 × 17.7
少女立像 / Standing Girl	1947 年頃	鉛筆、紙	25.2 × 16.5
少女の顔 / Face of a Girl	1947 年頃	鉛筆、紙	15.7 × 18.2
浦安 / Urayasu	1950 年代前半	インク、紙	14.5 × 19.0
浦安 / Urayasu	1950 年代前半	鉛筆、紙	15.9 × 21.4
『こどものもくろく』表紙原画 / Original Drawing for Cover Illustration of Kodomo no Mokuroku	1952	水彩、鉛筆、紙	25.2 × 20.5
浦安 / Urayasu	1954	鉛筆、紙	19.2 × 13.3
漁村 / Fishing Village	1956	油絵具、ボール紙	86.3 × 109.0
鬼 / Demon	1957	油彩、ベニヤ合板	145.0 × 112.5
MUSHININARU / MUSHININARU	1962	水彩、紙	23.4 × 34.7
作品 / Work	1962 年頃	水彩、紙	22.5 × 17.5
コラージュ / Collage	1966	墨、水彩、紙	36.0 × 52.0
コラージュ（試案） / Collage (Test Plan)	1990 年代	鉛筆、広告紙；インク、紙；写真、紙	25.7 × 36.4
コラージュ / Collage	制作年不詳	紙、ダンボール紙	50.0 × 43.2
表紙原画（鶏） / Original Cover Illustration (Rooster)	制作年不詳	水彩、鉛筆、紙	25.2 × 20.5
オブジェ構成：斎藤義重／撮影：大辻清司 / Composition: Ghiju (Yoshishige) Saitoh ／ Photograph: Kiyoji Otsuji (1904–2001 ／ 1923–2001)			
APN / APN	1953	ゼラチン・シルバー・プリント『アサヒグラフ』1953 年 2 月 18 日号「ASAHI PICTURE NEWS」のタイトル・カット	14.0 × 13.0
APN / APN	1953	ゼラチン・シルバー・プリント『アサヒグラフ』1953 年 3 月 11 日号「ASAHI PICTURE NEWS」のタイトル・カット	8.0 × 7.5
APN / APN	1953	ゼラチン・シルバー・プリント『アサヒグラフ』1953 年 4 月 15 日号「ASAHI PICTURE NEWS」のタイトル・カット	11.0 × 9.0
APN / APN	1953	ゼラチン・シルバー・プリント『アサヒグラフ』1953 年 5 月 6 日号「ASAHI PICTURE NEWS」のタイトル・カット	10.6 × 9.0
毛利武士郎 / Bushiro Mori (1923–2004)			
手の中の眼 / Eye in the Hand	1955	セメント	28.0 × 21.0 × 12.0
土橋醇 / Jun Dobashi (1910–1978)			
火の誕生 / Birth of Fire	1956	油彩、カンヴァス	145.8 × 135.3
佐藤敬 / Kei Sato (1906–1978)			
内部の殻 / Ecorce interieure	1960	油彩、カンヴァス	149.9 × 200.2
山口薫 / Kaoru Yamaguchi (1907–1968)			
暗い沼と馬二頭 / Two Horses at Dark Marsh	1961	油彩、カンヴァス	59.2 × 48.3
蔦の屏とらくがきの牛 / Fence with Ivy and Graffiti of Ox	1964	油彩、カンヴァス 北川原コレクション	45.0 × 52.5
堂本尚郎 / Hisao Domoto (1928–2013)			
連続の溶解 5 / Solution of Continuity No.5	1964	油彩、カンヴァス	130.0 × 162.5

今井俊満 / Toshimitsu Imai (1928–2002)				
人 / Person	1967	油彩、紙	110.0 × 80.5	
浜口陽三 / Yozo Hamaguchi (190–2000)				
太陽と蝶 / The Sun and Butterfly	1969	油彩、カンヴァス	29.5 × 29.5	
松澤宥 / Yutaka Matsuzawa (1922–2006)				
不詳 / Unknown	1960年代	インク、鉛筆、紙、布	245.0 × 71.0	
ロベルト・クリッパ / Roberto Crippa (1921–1972)				
無題 / Untitled	1961	インク、紙	25.2 × 17.7	●
無題 / Untitled	1961	インク、紙	25.0 × 17.8	●
吉田克朗 / Katsuro Yoshida (1943–1999)				
Work "16" / Work "16"	1971	シルクスクリーン、紙 45/110	21.0 × 21.0	●
無題 / Untitled	1972	シルクスクリーン、紙 3/110	21.8 × 21.4	●
田窪恭治 / Kyoji Takubo (1949–)				
不詳 / Unknown	1976	印刷、紙 8/50	30.2 × 24.1	●
本田真吾 / Shingo Honda (1944–2019)				
不詳 / Unknown	1979	顔料、紙	21.0 × 16.0	●

斎藤義重アーカイブ	
ノート・手帳	
ノート	1955.2–10
ノート	1955.11–1957.5
ノート	1957–1963
ノート	1959–1975
ノート	1963
ノート	1963
ノート	1968
ノート	1968
ノート	1969
スケジュール帳	1971
ノート	1973
ノート	1974.8–9
ノート	1974.10–1975.8
スケジュール帳	1975.1–12
ノート	1975.9–1976.10

書簡	
榎下町順子・関根素のからの書簡 [1977]	
佐藤敬からの葉書 [1960.9.15]	
佐藤敬からの葉書 [1960.11.16]	
高松次郎からの書簡 [1967.10.25]	
堀浩哉からの葉書 [1971.5.25]	
堀浩哉からの書簡 [1977.4.27]	
松澤宥からの書簡 [1965.5.11]	
松澤宥からの葉書「すべての生物および無生物のための白紙絵画」 [1967.7.6]	
松澤宥からの葉書「湖に見せる根本絵画展」 [1967.8.9]	
松澤宥からの葉書「霧と霊に見せる絵画展」 [1967.8.23]	
松澤宥からの葉書「死に見せ乳房を見る根本絵画展」 [1967.11.□]	
松澤宥からの葉書「見ない絵画と見えない絵画展」 [1967.□.□]	
松澤宥からの葉書「絵に見られる松沢宥個展」 [1967.□.□]	
松澤宥からの葉書「芸術家一切消滅大宣言 43210 アピール」 [1968.2.1]	
松澤宥からの葉書「松沢宥根本絵画非実体画集所有者之証」 [1968.2.2]	
松澤宥からの葉書「球をたずさえる歴訪展」 [1968.4.30]	
松澤宥からの葉書「電話メディアによる情報絵画はクールである」 [1968.5.30]	

松澤宥からの葉書「はがきに挿さまった絵」 [1968.6.8]
松澤宥からの葉書「ヴァニシングス消滅事天然自然シリーズ 5/12」 [1971.2.2]
松澤宥からの葉書「ヴァニシングス消滅事天然自然シリーズ 8/12」 [1971.6.3]
松澤宥からの葉書「ヴァニシングス消滅事天然自然シリーズ 9/12」 [1967.6.29]
松澤宥からの書簡 [1993.1.19]
宮脇愛子からの葉書 [1960.10.14]
宮脇愛子からの書簡 [1961.4.11]
山本孝からの書簡 [1966.6.24]
吉田克朗からの葉書 [1973.5.29]
吉田渠子からの葉書 [1973.6.25]
吉田克朗・渠子からの葉書 [1973.7.10]

教育関連資料（多摩美術大学大学紛争）

「多摩美大はこれでよいのかー教職員、学生の諸君に訴えるー」 多摩美術大学正常化促進連盟 1968.6
「全学生諸君へ 第二号 全学教授会に関する説明」 多摩美術大学全学教授会 1969.1.25
「全学生諸君へ 第三号 全学教授会のよびかけ!!」 多摩美術大学全学教授会 1969.1.26
「全学生諸君へ 第四号 全学教授会のよびかけ!!」 多摩美術大学全学教授会 1969.1.28
「本日の学生集会に参加する全ての多摩美生への呼びかけ」 すいどーばた反戦会議（多摩美大闘争支援委員会） 1969.1.28
「全学生諸君へー全学ゼミナールの提案ー」 多摩美術大学全学教授会 1969.2.21
「討論資料 No.1 反産協の不滅の団結で勝利の展望を切り開け！」 多摩美反帝学生評議会準備会 1969.3.3
「われわれの総括と展望（その1）」 多摩美術大学全学教授会 1969.3.20
「カリキュラムの再編と諸施設の現況」 多摩美術大学全学教授会 1969.3.27
「思想集団『存在』声明文」 1969
「多摩美造形作家同盟」No.1 多摩美造形作家同盟 1969.4.25
『闘争記』 多摩美術大学全学闘争委員会 1969.5.1
「確認書」 多摩美術大学全学教授会 1969.5.13
『『全共闘』トロツキスト暴力集団の本質』 日本民主青年同盟 多摩美術大学班 1969.5.15
「自同律」1号 多摩美造形作家同盟 1969.5.21
「美術家への提唱」 美術家共闘会議 1969.7.5
「声明」 多摩美術大学全学教授会 1969.10.20
「12月講座」 多摩美術大学全学教授会 1969.11
『『ロックアウト』を全面撤去せよ 授業開始をめぐって全学生に訴える』 多摩美術大学全学教授会 1969.11.24
「われわれ自身の岐路にのぞんで」 多摩美術大学全学教授会 1969.12.15
「多摩美闘争勝利」 油画ゼミ有志、デザイン科有志 1969.12.22
「謹賀新年（全学集会・各学年ゼミ・1月講座）」 多摩美術大学全学教授会 1970.1
「多摩美術大学教授会を支援する」 有志 226名 1970.2.23
「ゼミ通信（自主講座4月日程表）」 多摩美術大学学生教員共催 1970.3
「ゼミ通信（自主講座5月日程表）」 多摩美術大学学生教員共催 1970.4
『試行 古き調べは歌い終わったか』 多摩美術大学・全学パンフ編集委員会編 多摩美術大学・学友会 1979.4.10
「救対活動に参加しよう!!」 発行者・発行年不詳
「狂った進歩と調和の産物が万博だ!!」 発行者・発行年不詳
「現実無関心から仮象へのエネルギーとその方向性を踏えて蜂起を!!」 発行者・発行年不詳
「全学友の皆様へ 2月28日」 1年生女子有志 発行年不詳

教育関連資料（その他）

「公開パネルディスカッション 現代美術とは何か・その焦点」案内状 小林昭夫洋画研究会創立5周年及び富士見町アトリエ・現代美術ゼミナール発足記念 進交会館ホール 1967.9.27
「シンポジウム 電子計算機と芸術」チラシ Computer Technique Group 多摩美術大学美術大学講堂 1967.10.9
「12月ゼミナール YVES KLEIN モノクローム」リーフレット 武蔵野美術大学シンポジウム企画委員会 吉祥寺校第一講義室 1967.12.11
「五月二十六日きゆうしともびきひのえさる今日は歴史の終りで始め隙間でおこなう FACE TO FACE」 富士見町アトリエ A、B ゼミナール 横浜市民ギャラリー 1968.5.26
「にっぽん・かまいたち」 富士見町アトリエ 横浜市民ギャラリー 1968.8.13-18
『祖国と学問のために』 全学連中央執行委員会 1969.8.7

『アーティスト・ユニオン』No.1, 2, 3 アーティスト・ユニオン事務局 1975
『B ゼミリポート 第3集』 富士見町アトリエ 1976.11.1
「第1回 TSA 祭 パンフレット」 学校法人中延学園 東京芸術専門学校 1982.10.30-11.3
「東京芸術専門学校 学校案内」 学校法人中延学園 東京芸術専門学校 1985 ほか
「東京世田谷区福祉会館のごあんない」 東京世田谷区 発行年不詳
「反戦のために」 今堀嘉治、榎倉康二、高山登、三河治夫 発行年不詳

その他資料 『こどものもくろく』 日本教科書販売株式会社 1952 『斎藤義重展』 展覧会図録 東京画廊 1960 瀬木慎一『シメーズ 現代の芸術と建築 別冊：斎藤』 No.58 シメーズ 1962.3-4 斎藤義重 制作メモ 制作年不詳

斎藤義重文庫 『第30回ヴェネチア・ビエンナーレ』 展覧会図録 1960 『ピエール・レスタニーによる デュフレヌ、ヘインズ、ロテラ、ヴィレグル』 展覧会図録 シュワルツ画廊 1963 『プサイによる松沢宥個展』 展覧会図録 青木画廊 1963 『第32回ヴェネチア・ビエンナーレ』 展覧会図録 1964 『9つのタベ 演劇とエンジニアリング』 公演図録 現代舞台芸術財団 1966 『ニキ・ド・サンファル ナナズ』 展覧会図録 イオラス画廊 印刷ムルロ工房 1966 (オリジナル・リトグラフ4葉入り) 『ポップとオプ 65のグラフィック作品展』 展覧会図録 アメリカ芸術連盟 1966 『スパダーリ 政治について知っている2、3のこと』 展覧会図録 シュワルツ画廊 1970 『Galant』 No.4 La Galant Village (内海画廊内) 1969 『美術史評』 No.1, 3, 4, 6, 8, 9 美術史評社 1971-1978 『記録帯：Art & document』 No.1, 3, 4 美術史評社 1972-1973 シンポジウム「美術という幻想の終焉」 リーフレット 長野県信濃美術館 1969

謝辞

本展の開催にあたり、下記の個人、機関の方々のご協力をいただきました。
 ここに心からの御礼を申し上げます。(五十音順、敬称略)

岸井真弓	羽生武俊	吉田有紀	一般社団法人松澤宥プサイの部屋
木内真由美	古家満葉	米山建彦	多摩美術大学アートアーカイヴセンター
櫛下町順子	堀 浩哉	Marilou Barbanti	多摩美術大学大学戦略室
恋川智子	松澤久美子	Valeria Morandi	東京画廊
小清水漸	松澤春雄		ときの忘れもの
斎藤和土	松下賢太		宮脇愛子アトリエ株式会社
鈴木佳世	松田昭一		ユミコチバアソシエイツ
高松靖子	宮田有香		The Estate of Yves Klein
千葉由美子	山本豊津		Fondazione Lucio Fontana

＊斎藤義重アーカイブは文化庁「平成29年度我が国の現代美術の海外発信事業」の助成を受けました

コレクション展

斎藤義重という起点ー世界と交差する美術家たち

2024年4月20日〔土〕ー6月30日〔日〕

神奈川県立近代美術館 葉山 展示室3b

執筆：菊川亜騎（神奈川県立近代美術館学芸員）
 編集・発行：神奈川県立近代美術館
 ©2024 The Museum of Modern Art, Kamakura and Hayama

表紙：撮影者不明「斎藤義重 ヴェネチアにて」1960
 p.1-5, p.2-8 :©Fondazione Lucio Fontana, Milan, by Siae 2024
 p.1-6, p.2-9 :©The Estate of Yves Klein c/o ADAGP, Paris



The Museum of
 Modern Art,
 Kamakura &
 Hayama
 神奈川県立近代美術館